

潜伏キリシタン墓の配置原理・旧木の口墓所*

野村俊之**、加藤久雄、白濱聖子、藤本新之介***

Placement principle of hidden Christian cemetery in the Goto Islands

Toshiyuki NOMURA**, Hisao KATO, Satoko SHIRAHAMA and Shinnosuke FUJIMOTO***

キーワード

潜伏キリシタン、五島列島、墓の配置

はじめに

別稿で調査概要を報告した旧木の口墓所は緩斜面上に造成された3段の平坦地に展開する。一部の例外を除き、造営年代や被葬者が確定できる墓標等は現存しておらず、また、現状変更を伴わない調査であったため、地下埋葬施設の変遷や埋納品による年代推定も行っていない。しかし、埋葬の最少単位と考えている石組み遺構（以下石組み墓とする）の配置は図化出来ており、ある程度の規格性は読み取ることが可能であると考えられる。また、管理者である木口氏は墓所全体を清掃整備したいという意向をお持ちであったため、それにあわせて表採遺物の記録を行うこともできた。これら遺物は必ずしも原位置を保っているものではないが、少なくとも各墓に対する供献時期の傾向を推定することは可能であろう。

本稿ではこれら調査によって得た資料から本墓所の配置原理を考察するとともに、当該時期の他の墓所資料と比較を行い、その特異性または普遍性の見通しを試みる。

1. 近世墓の配置原理

一般に墓参に際してイメージされる墓の姿は納骨堂を除けば、「〇〇家之墓」や名号・題目、近年では「和」「一処俱会」等の一族意識や宗教・宗派を強調しない言葉が刻まれた墓石であることが多く、同時に一族墓から家族墓への意識の変容も萌芽している。また立地も元々は集落内の共同墓地であったもの・寺院等の管理墓地・公営民営を問わない墓苑であることが多い。カトリック墓もこういった傾向が進みつつある。

一族墓に注目すると、カロート式墓^(註1)の横に戒名・法名塔が建立され、被葬者が誰であるのかが明確にされていることが多いが、一方合葬前

の墓石をその区画の周囲などに立て並べる例も少なくない(朽木2010)。また、カトリック墓もこういった傾向が進みつつある(久賀島キリスト教墓地調査団2007)。

およそ墓所の造営については宗派教義的なもの・慣習的なもの・地形や墓域の制限・社会的要請等何らかの規格性が存在し、墓所形成の過程では上記の変化による初元的な規格性が変化することがしばしば起こる。筆者は近世大名墓の配置について予察を行った(野村2010 野村・美濃口2013)が、これは大名家並びに有力家臣団を対象としたものに限られており、いくつかのバリエーションもみられ、当該期の普遍的な配置原理とは言いがたい。しかしながら、当初規格されていた墓所空間が後年造立が増加した結果拡張・移動・移転・統合または合葬等・統一性が喪失する状況^(註2)は、藩または大名家の意図が介在しているとはいえ墓所造営に共通する問題発生とその解決方法の一端を示すものにほかならず、近代以降カロート式の一族墓に変化する事例^(註3)もまた同様である。

さて、ここで旧木の口墓所に目を向けてみると、管理者である木口榮氏の記憶によれば、当該墓所は4年前まで竹林の中に包まれ、木の口集落住民の代々の墓所であり不用意に立ち入ることは親から禁止されていたこと、カトリック信者の一部は浦頭教会墓地に改葬された他、住民の転出等によっても改葬が行われたこと、最新の改葬は平成18年の墓石を持つ2基(年記銘はそれぞれ、明治15年・大正14年)であることが語られている。これを踏まえれば、本墓所はいくつかの改葬による石組みの消失はあるものの概ね造営時の姿をとどめていると考えて良い、ただし造営期間中の墓所整理の有無については不明である。

2. 旧木の口墓所の配置

別稿で述べたように当該墓所は概ね上中下の3

* Received March 6, 2014

** 石造遺産調査会(長崎ウエスレヤン大学 地域総合研究所客員研究員)

*** 長崎ウエスレヤン大学 現代社会学部、Faculty of Contemporary Social Studies, Nagasaki Wesleyan University, 1212-1 Nishieida, Isahaya, Nagasaki 854-0082, Japan

段に分かれる。現況でもっとも石組み墓が集中するのは中段の44基であり、次いで下段の19基、上段がもっとも少なく4基となる、これらには確実な改葬記録と解体された墓石を伴う2基を除き、改葬痕跡を含まない。基数は各段の面積を反映しているものの、密集度から見れば中段に集中し、上段がもっとも疎らとなる。なお木口榮氏によれば、上段には一時石製中心十字架が建てられており、後に移転されたという。

ここで各段ごとの配置状況をみると、上段は散発的、下段ではあまり規則的傾向がみられないのに対して、中段ではその西側縁辺部にほぼ一列に石組み墓が並ぶ他北側の9基・中央の12基は二列に配置されており、一方南側ではやや配置が乱れる。下段では石組みの軸がややばらつきを見せる。また空隙地には改葬痕とみられる浅い落ち込みが観察され、本来は下段も含めた今以上の石組み墓が存在し、上段を除けばかなり空間的余裕のない配置であったことが考えられる。また現実問題として、このような密集空間に長棺を埋葬することは難しい。このような状況を踏まえて筆者らは上段部分は後世追加的に墓所となった可能性を想定している。これは、カトリック墓碑と考えられる十字浮彫を持つ板石墓の存在や、前述の石製中心十字架の設置からも裏付けうるものである。また、開墾が下から上へと広がる傾向（加藤・野村2013）と、一般的に斜面地において墓所がより上位を占める傾向があることを考え合わせると、墓所の上段に続く旧耕作地が当初の墓所設置以降開墾された事も想定できる。

本墓所は現状で墓石を伴わないものが大半であり、築造年代や男女、年齢等を裏付ける資料はないに等しい。なお一般に近世墓における年記銘は被葬者の命日を示すものが大半であり直接築造年代を反映するものとは限らない（野村2011）、同様に年齢は行年を刻んだもの以外は仏式墓にあっては位階（尊称）によりある程度の基準を設定できるが（田中1996・藤井2006）、成人・未成人の閾値は時期や宗派、あるいは士分男子では実際の元服前後により左右される傾向があるため明確には示し得ない。ここでは、略測値から導き出された数値を以ってその目安としたい。性別に関しては目安となるべき数値は見いだせなかった。あるいは石組みの構造等によって、性別を含めた属性や年代変化が追える可能性はあるが、地下埋葬施設や、直接的には人骨による形質的分類による裏付けは今回の調査対象ではない。同様に親族関係

も裏付けは取ることができなかった。

まずそれぞれの略測値から面積を算出した^(表1)。対象は66基の内改葬墓2基を除いた、一部が不明瞭なものについては、明確な一辺の2乗を想定した。これらを配置図上に表示したものが図1である。その結果面積の傾向は概ね1㎡前後のもの（三尺四方）（大型）23基、0.75㎡前後のもの（中間型）7基、0.5㎡前後のもの（中型）25基、0.33㎡（1/10帖）を下回るもの（小型）7基を数える4群に大別できる。対象は地上施設がそのまま地下埋葬施設の大きさを規定するものとは言い切ることにはできないが、大型及び中間型のものを成人、小型のものを小児と置けば、その比率は30:7となり成人墓が卓越する、中型を小児に編入すると30:32とほぼ拮抗する。

分布傾向は、中間型を成人墓とするならば、中段西端にほぼ1列に並ぶ中段・下段の南側に集中する、中段北端もある程度まとまって集中する傾向がある。

同様の手法を用いて縦横比を算出した^(表1)上、配置図上に表示したものが図2である。概ね方形を示す石組み墓60基の内、縦横比が100%前後を示すものが49基を占めるのに対して、仮に135%以上のものを長方形と位置づけるならばそれらは11基、18%強にすぎない。面積分布と同様にこれらもある程度集中傾向が見出され、中段北側及び中段南端に列状にならぶ。

禁教下における大村藩が実施した「長墓改め」の「長墓」が具体的には何を示すのか^(註5)、例えば伏碑やその変形と考えうる長方形の板石であるのか、単に平面形態が長方形を呈するのか明確でない。現時点ではこの意味するところは明らかではないが、配置状況が時期的変遷を示すものであるならば、形状変化はある程度の時代性を示す可能性は残る。

3. 遺物の散布状況

それでは、遺物の散布状況からある程度の造営時期が推定できないであろうか。

今回の調査では、表採遺物を記録するにあたり遺物ナンバーを与え、配置図上にドットを落とした。これを美濃口氏の観察による年代・形態・産地等の推定を行った、これらは動物遺体1点・ガラス瓶1点を除きすべて陶磁器である。但し、接合等の整理作業は未だ途上であり、記録点数がそのまま個体数を反映する状況に至っていない。これらの大部分は、墓前に供献されたものと考えて



石組み墓サイズ配置図(S=1:200)

図2 石組み墓サイズ配置図 (S=1:200)



石組み墓形状配置図(S=1:200)

図1 石組み墓形状配置図 (S=1:200)



図3 旧木の口墓所・遺物分布図 S=1/150

いるが、改葬時に掘り上げられ破棄された副葬品の可能性もある。

ここでは図3のように表採遺物の製作年代を大別・ドット形状により示した。年代は概ね、移住期である18C後半から19C前半、19C前半から禁教の解けた明治初年頃、19C末頃、太平洋戦争終結の20C前半、終戦から現在に至る時期を想定し

ている、細片であるため時期が不明な物も少なくない。ただし、これらはあくまでも製作時期を示すものであって、実際に墓前に奉獻された年代や造営年代を直接的に示すものではないことに留意する必要がある。入手後世代を経て供えられたものもあれば、逆に造立後しばらくして、例えば祖父の墓前に新しく購入した陶磁器を供えることも

考えうるものである。同時に採取地点は原位置を示すものではない。一般に露出した遺物は標高の高いところから低いところへ水流などによって移動する事が考えられる他、破損時または改葬時に人為によって不作為に破棄されたものも含まれるであろう。近接地に人家や耕作地以外の施設が認められないこと、里道に車両の乗り入れが困難であり、墓所の存在を知らないものが廃棄場所を設定することが考えにくいことなどから、基本的には本墓所の供献に関連する遺物であろうが、碍子1点が認められたことから墓所とは無関係な物も存在し得る。

この分布を見る限りでは、全般に北側では遺物の散布は疎らであり、南側中段以下、及び墓域より下段の里道上に集中する傾向がある。この内里道上の遺物は年代不明の細片が多く、流出した遺物が散乱している状況が見て取れるが、近世の遺物がある程度まとまっていることに注目したい。

年代別の分布状況に注目すると、まず中段の中心やや南寄りの倒木付近および改葬墓周辺に20C代の陶磁器が目立つ。後者は、それぞれ明治大正期の年記銘がある墓石を持ち被葬者が特定できること、改葬が平成に入ってからであることを考えれば理解は容易であり、これらが後裔による継続的な墓前祭祀が行われたことを示すものであるならば近代以降、特に20世紀に入ってからへの墓に対する意識を物質的に表したものと見えるであろう、また内一点は明らかに大戦後に製作されたものである。こう考えると、中段倒木そばの一群も造営時期ははかりかねるが、墓石はなくとも20Cに入ってから被葬者がある程度特定され墓前祭祀が継続されたことを示すものではないだろうか。

幕末から明治期の遺物は特に中段南端に集中しており、次いで中段西端の中心付近から下段北側に向かってややまとまる傾向を示す。

最後に移住期に相当する18C後半から19C前半の遺物は、散発的ながら下段中央からその直下または、雨水の流路に相当する里道部分で多く採取されている。

4. 小結

以上の結果から明確にいえることはあまり多くないが、第一に大型墓と小型墓に対応関係があまりみられず、配置による親子関係を推定することは難しいことが挙げられる。また、小型墓が平坦面の上端で優越する傾向は認められ、一定の配置原理を示すと考えていいのではないだろうか。

遺物の分布と形状にも相関関係は薄く、平面形状と供献時期は直接には結びつけがたいが、遺物の分布には下から上・南から北に向けて新しくなる傾向はある程度認められる。但し供献時期が古いほど低い方へと流出するのは自然なことである。

このように詳細な関係性は現時点では把握しきれなかったが、課題を挙げるとすれば、野村には墓前に陶磁器を供献するという行為には日本的な、言い換えれば仏教的（例えば、三点具足・五点具足といった考え方）な印象があったものの、潜伏期の意識がどうであったのか、また禁教廃止後の意識変化がどうであったのかの手がかりには成り得る可能性があり、今後実施される現況調査等にあつてはこの点に留意していただけるよう望む。

5. 他の九州における近世・近代墓地の事例

以上のように、本墓所では墓石もなく、また現況調査であるという点からも解明できない多くの課題が残った。

そこで、九州での他の調査例を挙げて検討してみる。ここでは調査報告のある同時期の墓所として、禁教期前から禁教後まで継続する大分県臼杵市所在の下藤遺跡（神田2012）、熊本県天草市所在の白片共同墓地（立平・平田2012）、大分県女狐遺跡（田中1996）・福岡県筑紫野市所在の原田遺跡群（森山2003・2006）を取り上げる。ここであえて非キリシタン墓である女狐・原田両遺跡を取り上げた理由は、ある程度墓標が残存しているため被葬者および被葬者の没年代が比較的明確であり、墓籍図等により一部親族関係が追える事により、当該期の造墓原理をある程度、明確にできるためである。

1) 臼杵市下藤キリシタン墓地

2011年より調査が行われている臼杵市（旧野津町）に所在する。以前より「常珎」銘墓碑、「INRI」銘石製十字架残欠の出土で注目されていた。発掘調査では共通した東西方向の主軸をもつ長方形墓が列をなして並び、中央部には礎石建物・石敷き遺構があり、礼拝堂的性格を持つ建物・中央十字架の存在、北側では石敷き通路が確認されている。各遺構は長方形の石組みを地上標徴として持ち、その周囲には破壊された石製墓碑が散乱する。また、小児のみの列埋葬とともに小児墓と成人墓が混在する配置は「母子埋葬」の可能性が指摘されている（田中2012）。これらは16C末

と17C初頭に時期が与えられているが、最終埋葬年代は明らかではない。布教期から事実上黙認された17C第一四半期に造営されたものと考えられている。

2) 天草市白片共同墓地

天草市今富に所在し、今富の農村景観保存調査に際して、天草市教育委員会により個別の現状調査がなされた。A・B・Cの3地区に分かれ、墓石を伴うもの16基、基壇のみ1基、集石32基、墓壇のみ2基が報告されている。もっとも集中するA区ではやや不揃いながら概ね4～5列の列埋葬様を呈している。また墓石の年記銘で見る限り天保年間から大正期まで存続する、大部分は信女・信士号を持つ。

この墓地で特徴的なのは、墓石基壇部分に十字浮彫を持つことであり、この部分は通常墓石竿石の下になるため外見上はその存在を確認できないことである。

基壇部分のみ残る墓があることから、石組み墓のいくつかが基壇下部の構造物である可能性が指摘されている。

3) 大分市女狐近世墓地

大分市大字高崎に所在した集落墓地である。1986年九州横断道路建設に伴い移転する際に大分県教育委員会によって調査が実施された、近世墓地の考古学的悉皆調査と、近世墓石形式分類、墓壇と墓石の関係を整理・関連付けした先駆け的調査である。

墓の総数は139基を数えA～Eの5群に大別される（但しB・E群は調査前に移転改葬）。1772年の墓所整理を経て墓所は各家ごとにまとめて造営されている。1720年代に造営が始まり明治34（1901）年銘が最新の墓石である、その後の墓は寺院内墓所に移転して継続されており、報告者は1902年の大分県「墓地及び埋葬制限細則」の改正をその契機と推定している。

ここでは戒名の脚字（階位）と墓壇の法量分析から132基中53基が小児墓^(註5)と判明し、これに継続年代から更に21基を婚姻前死亡者として、成人墓との構成比が過半数にのぼるであろうことを導き出している。

4) 筑紫野市原田第1号墓地

筑紫野市原田に所在する近世から近代にかけての墓地である。土地区画整理事業のため1989年か

ら91年にかけて調査が実施された。そのほか、2・40、41号墓地の調査が行われているがここでは主に1号墓地について記述する。調査自体は改葬が進んだ時点での着手であったため、墓域全体には及んでいないが、すでに倒れていたもの、改葬に伴い墓壇内に落とし込まれていたものを含め29基の銘を持つ墓石と52基の墓壇その他が調査対象となり、火葬骨を収めた蔵骨器や土瓶を転用した胞衣容器が出土している。また墓壇上に1ないし数個の礫を配した物もあり、すでに墓石が失われたもの、あるいは当初から墓石が存在しない地上標徴そのものであった可能性がある。

他の地点も含めたこの調査で特筆すべき点は近隣の寺院に保存されていた明治22年編纂の「墓籍図」・「墓籍」との比較が行われ、各墓と被葬者、祭主者の対応が検討されている。また、検出された人骨の性別・推定年齢からも被葬者の対照が行われている。後世の改葬もあって同墓地全体で被葬者と埋葬年代が確定出来たのは約8.3%とのことであり、現状から原型を復元する難しさを端的に物語っている。墓籍図では埋葬は原則として一族単位でまとまっており、墓標には墓石とともに木標も使用されている。しかし木標である表示があっても実際には墓石が見いだされるものもあり、墓石建立の時期を考える上で重要である。

墓石調査で注目されることは、天保年間に俗名銘を持つ墓石が出現しており、俗名の使用が仏教からの離脱を必ずしも示すものではないことを示唆している。

6. 近世～近代墓としての旧木の口墓所

前項で九州内のキリシタン墓と近世～近代墓の調査を概観した。布教期からその直後にあたる下藤キリシタン墓は中央建物・中心十字架・墓道を始め整然とした配置原理を持つ一方で成人・小児の混在から母子関係が指摘されている。これを宗教的配置規範と家族的配置が反映しているものと考えすることはできようが、一族墓としての配置原理が働いているか否かは明らかでない。九州島外も含めたキリシタン墓地の列埋葬や地下構造物、配置原理等の墓制について『キリシタン考古学』（今野2013）に取りまとめられている。これに対して幕末からの造営が確認されている片白共同墓地は、残存している墓石銘から一見一般的な規格集落墓にみえながら、基壇に明確に刻まれた十字によって潜伏キリシタンあるいはカクレキリシタンを信仰する被葬者を含む、このことから戒

名・法名の有無が必ずしも信仰内容を反映しないことが理解できる。また、残存状況から石組みが最終的な地上標徴とは限らず、墓石や基壇が失われた残存施設である可能性が示された。

女狐近世墓地では、墓石銘から成人・小児の構成比が導かれ、集落における家族、死者の動向が伺われるに至った。原田墓地では、墓石・遺構・人骨と墓籍の対比を検証する方法が示され、追葬や墓所整理の過程で原初の姿が不明確になって行く様相が見えてきたとともに、「墓標」のあり方に一石を投じた。

下藤キリシタン墓地を除けば、いずれも旧木の口墓所に近い造営年代であり、当該期の墓所のいくつかのあり方を示すものといえよう。特に女狐・原田にあっては、墓所内の後世が「一族」を単位とする傾向が異なる地域でみられるという、配置というよりは占地の原理が働いている。

さて、以上のような状況を踏まえて再度旧木の口墓所の状況と比較してみると、

1. 列埋葬と不定形な配置が混在し、明確な規則性がみられない。
2. 2基の例外を除き墓石を伴わないが、それは必ずしも「墓標」を持たないことを示さない。
3. 成人・小児墓の混在は「家族」単位での配置が行われた可能性を示す。
4. 改葬は伴うものの、それは改宗や祭主の移転に伴うものであり、墓所の再配置はみられないが、墓域拡張の可能性はあること。

等が挙げられる。

これに対して、1. については布教期及びその直後のキリシタン墓のような明確な規則性が認められないが、中段西側の列埋葬は表採遺物の散布状況からもむしろ新しい様相を示す可能性があること。また、石製中心十字架の存在から、禁教後戦後のある期間までカトリック墓的な配置が行われた可能性も考えられ、上記の規則性の原理を補強しうる。

2. の墓標の有無は各石組み墓構造の詳細観察により有無を確認できる可能性があること。これは別稿で示した実測図のように中心に長楕円形の円礫を持ち本来それらが建てられていた可能性が高い事、また石組みの東側に接して大ぶりの角礫1を配するものがあること、石積みが2段以上あり、その上に墓石の基礎・基台を配置するにはあまりにも不安定なものが見られることから、これら実測例では、墓石が取り除かれた後の姿であることには否定的にならざるを得ない。また「木

標」は、表土除去後の検出面精査によって明らかにできよう。なお野村は仏教的「塔」、死者の事跡を伝える「碑」、埋葬地点の存否が明確で無い「地上標徴」、供養を目的とした「供養塔」、分骨や「爪髪塔」など明確なもの、そうでないものをすべて含め墓と捉え、石で製作されたゆえに現在に至るも残存する属性から「墓石」という名称を意識的に使用している(野村・美濃口2013)。

3. 成人・小児の混在はみられるが、1成人墓に対する推定された小児墓のバランスがとれておらず、家族墓であるとは言い切れない。また3項で示したとおり、成人・小児の構成比が女狐墓地に近似しており、少なくとも戒名階位という童女・童子レベルでは同じ様相を示す。なお、原田墓群では袍衣容器として土瓶がしばしば使用されており、採取遺物の中に細片ながら土瓶が含まれていることに注目している。

4. の墓所整理については、改葬を除けば時系列に沿った初元的姿の累積をほぼそのまま残している可能性を指摘したい。特に現存する石組み墓が改葬痕跡及び空閑地から推測される改葬墓を大きく上回ることは、それだけ改葬に必要な条件、すなわち墓の被葬者が明確でなかったことを示すと考えられ、このことから、それぞれの単位が先祖の墓つまり一族墓とは考えにくい状況であったといえよう。これは、石組み墓群の単位が一族によって規定されていないことを裏付けているのではないだろうか。

7. 旧木の口墓所と調査の意義—まとめにかえて—

本墓所は戦後のある時期からほとんど手付かずのまま、その大部分が竹林に覆われ、集落の人々にとってはそこに墓があるという認識はあるものの、詳細が忘れられつつある墓所であった。カトリックの復活後、徐々に改葬は行われてきたものの、墓石あるいは「墓標」の不在が、具体的な被葬者を想起することができない要素として逆に機能していると考えればこの現象は説明できるであろう。これが、潜伏キリシタン墓の一つの類型を示す貴重な例であることは、管理者の木口氏の記録と、口伝によって示されたことと合わせて強く主張したい。

今回の概要調査は現状変更を伴わない、したがって地下埋葬施設等の実態を知り得ないものであった。しかし発掘調査はしばしば開発等による現状の変更、さらにはいえば破壊を前提とする調査であることが多く、また、近世以降の墓に関して

は改葬後に調査実施するケースが多い。その意味で白片共同墓地同様「現時点」での記録をそのまま取ることができた調査例として有意義なものであった。また、管理者の墓所を清掃するご意向により、結果としてあまり例のない表採遺物の全点記録につながった。整理作業はまだ途上であり、今後本稿を否定する新しい知見が得られるかもしれないが、この表採遺物と石組み墓石配置から造営年代をある程度推定し得る可能性を示せたことは、たとえそれが偶然とその場の判断の積み重ねであっても、今後の現況調査になんらかの手がかりになるのであれば、調査者冥利に尽きる。今後整理作業や、悉皆実測によって新たな情報を得、更に深化した考察が行えることを期待したい。また別稿と繰り返しになるが、後期潜伏キリシタンの故地である長崎外海地区を中心とした旧大村領地域との比較調査は実態とその系譜を探る上で、必要不可欠である。

最後に現場でかわされたある会話を挙げて、情動的な予察としたい。

「禁教が解けた時に木の口の人々は喜んで、先祖のお墓に水や好物をお供えたのかもしれないね。」

謝 辞

墓所管理者である木口榮氏には今回の調査にあたり様々なご配慮を賜りましたとともに、旧木の口墓所を始め福江島内の潜伏キリシタン、カクレキリシタンに関する情報のご提供を頂きました。熊本市観光文化交流局美濃口雅朗の全面的なご協力により遺物の観察を取りまとめることが出来ました。墓所配置に関しては、田中裕介別府大学教授、平戸市生月町博物館島の館中園成生様よりご教示を賜るとともに関連資料についての示唆を頂きました。筑紫野市教育委員会文化情報発信課森山森山栄一氏、天草市文化部世界遺産推進室平田豊弘室長、九州近世大名墓研究会の皆様から貴重な情報のご提供を頂きました。またデジタルトレースは堀章子氏、石造遺産調査会天本雅氏のお手を煩わせました。永治克行氏をはじめ五島市のみなさまには大変お世話になりました。末尾にはなりましたが、厚く御礼申し上げます。

本研究の一部は、長崎ウエスレヤン大学地域総合研究所2013B 3の研究費によっておこなわれたものである。

註

- 1 唐櫃とも表記する。墓石基壇部分または地下に空間を設け、遺骨（多くは火葬骨）を納める型式の合葬墓であり、今日の一般的な墓形態である。
- 2 例示すると、墓所空間を新たに設ける佐土原藩島津家高月院墓所、川を挟んだ対岸に新たに墓域を設けた福江藩五島家大円寺墓所、後代の藩主墓が移動する熊本藩細川家妙解寺・泰勝寺墓所、墓域自体が繰り返し拡張を行う宇土支藩細川家泰雲寺墓所、佐賀藩高伝寺のように全体的な墓所整備・各寺院からの墓石の移転・子女や殉死者の合葬がおこなわれるものなどが挙げられる。
- 3 八代松井家春光寺墓所など。
- 4 報告者は童女・童子号を持つ戒名について7才以下を小児と規定している。
- 5 白藤キリシタン墓地のほか、平戸市ウシワキ遺跡（北島・塩塚2009）では、地上に長方形の石組みを持つ墓が検出されている。

参考文献

- 1996 田中裕介『女狐近世墓地—大分市高崎所在女狐集落近世共同墓地の調査—』九州横断自動車道路関係 調査報告書5」大分県教育委員会
- 2000 綿貫俊一『小野家墓地発掘調査報告書 大分県文化財調査報告書第111集』大分県教育委員会
- 2003 森山栄一『原田第1・2・40・41号墓地上巻 —原田駅前土地区画整理事業知内埋蔵文化財調査報告書1— 筑紫野市文化財調査報告書第77集』筑紫野市教育委員会
- 2006、2007 藤井正雄『戒名のはなし 歴史文化ライブラリー217』吉川弘文館
- 2009 北島聖美・塩塚浩一編『キリシタン寺院跡（旧中津良教会跡9・ウシワキ遺跡）』市内遺跡確認調査報告書Ⅷ 平戸市の文化財62』平戸市教育委員会
- 2010 朽木量『近世墓標研究の成果と総合的な墓制研究への期待』墓制・墓標研究の再構築 歴史・考古・民俗学の現場から 岩田書院ブックレットH-06』岩田書院
- 2010 野村俊之『細川刑部家墓所について』第2回大名墓研究発表資料」大名墓研究会
- 2012 神田高士「下藤地区共有墓地の発掘調査と16・17世紀のキリシタン墓地」大分県地

方史」大分県地方史研究会
 2012 田中裕介『キリシタン墓地の構造』「一般社団法人日本考古学協会2012年度福岡大会研究発表資料集」日本考古学協会2012年度福岡大会実行委員会
 2012 立平進・平田豊弘『今富地区の文化的伝統』「天草市今富の農村景観 保存調査報告書・保存計画書」天草市教育委員会文化課世界遺産登録推進室
 2013 今野春樹「キリシタン考古学研究ーキリシ

タン遺跡を掘るー考古調査ハンドブック8」ニューサイエンス社
 2013 野村俊之・美濃口雅朗『九州近世大名墓調査の視点』「第5回大名墓研究会発表資料」大名墓研究会
 2013 加藤久雄・野村俊之『半泊の文化的景観「祈り暮らす島」 文化的景観調査報告書第1集』半泊地域協議会・石造遺産調査会

表 1

遺構番号	段	種別	平面形	長さ	幅	縦横比	面積	規模	レベル	方位	使用磔	石材	パターン	観察	備考
1	上	伏碑	長方形	69	48	143.8%	0.33	小	100	110		硬質砂岩		実測済み	
2	上		不整形 三角形 (本来は方形?)	80+α	80	100.0%	0.64	中	89	120	角磔	砂岩～泥岩・多孔質石英斑岩	角磔囲み	一部埋没又は改葬	
3	上	小児墓?	方形?	70	60	116.7%	0.42	中	83	90	円磔・一部角磔	砂岩～泥岩・多孔質石英斑岩	外周列状	中央部はナシ(埋没?)	
4	上	小児墓?	不整形	57	40+α	142.5%	0.23	小	88	75	円磔・角磔	砂岩+多孔質石英斑岩	角磔囲み		
5	中		長方形	117	70	167.1%	0.82	大	154	115	円磔・一部角磔	砂岩	角磔囲み		
6	中		方形	85	75	113.3%	0.64	中	146	185	角磔	砂岩～泥岩	大型磔外形・2段以上	樹木により破損	
7	中		不明	120	60+α	200.0%	0.72	大	155	195	角磔・小円磔	砂岩・珪質砂岩	角磔囲み+小円磔	右半分埋没	
8	中		方形	67	74	90.5%	0.50	中	162	200	角磔+円磔(多孔質石英斑岩に限る)	泥岩・多孔質石英斑岩	囲み+充填・中央に大型角磔	実測済み	
9	中		長方形	65	95	146.2%	0.62	中	152	180	角磔+円磔	泥岩・多孔質石英斑岩	囲み+小磔充填中央長円磔		
10	中	小児?	円形	77	70	110.0%	0.54	中	163	180	円磔+角磔・大型角磔	砂岩～泥岩+多孔質石英斑岩	円磔囲み		
11	中		長方形	111	83	133.7%	0.92	大	172	120	角磔	砂岩～泥岩+多孔質石英斑岩	角磔囲み+磔充填		
12	中		長方形	117	85	137.6%	0.99	大	191	205	角磔・円磔	砂岩・凝灰岩・珪質砂岩	囲み		
13	中		方形	86	86	100.0%	0.74	中2	183	160	角磔・円磔	砂岩・凝灰岩・珪質砂岩	角磔囲み+小磔充填		
14	中		長方形	125	76	164.5%	0.95	大	188	140	角磔	砂岩～泥岩	角磔積み上げ	15を切る樹根	
15	中		方形	76	68	111.8%	0.52	中	197	120	角磔	砂岩～泥岩	角磔囲み+小磔充填		
16	中		方形	82	90	91.1%	0.74	中2	194	105	角磔・一部円磔	砂岩～泥岩・珪質砂岩+多孔質石英斑岩	角磔囲み+小磔充填	17を切る	
17	中	小児?	方形	70	65	107.7%	0.46	中	191	100	角磔・一部円磔	砂岩・多孔質石英斑岩	角磔囲み+中心大型角磔		
18	中		方形	90	75	120.0%	0.68	中	191	105	大型角磔+角磔+円磔	砂岩～泥岩・凝灰岩	大型角磔囲み+小磔充填+中心長円磔	実測済み	
19	中		長方形	102	70	145.7%	0.71	中2	204	95	大型角磔+角磔+円磔+小円磔	砂岩～泥岩+多孔質石英斑岩	大型角磔囲み+小円磔充填	実測済み	
20	中		方形	105	105	100.0%	1.10	大	209	90	大型角磔+角磔+円磔	砂岩～泥岩+多孔質石英斑岩	大型角磔囲み+円磔充填・中央に角磔	実測済み	
21	中	小児墓?	方形	75+α	80	93.8%	0.60	中	193	95	角磔+扁平小円磔	砂岩～泥岩+多孔質石英斑岩	大型角磔囲み+小円磔充填	一部埋没	
22	中	小児墓?	方形	70	76	92.1%	0.53	中	191	95	大型角磔+小角磔	砂岩～泥岩・安山岩・凝灰岩	大型角磔囲み+小角磔充填		
23	中	小児墓?	方形	70	65	107.7%	0.46	中	199	85	角磔+円磔	砂岩～泥岩+多孔質石英斑岩	磔囲み+小磔充填	実測済み	
24	中		不整形	105	112	93.8%	1.18	大	207	95	角磔・一部円磔	砂岩～泥岩・珪質砂岩・凝灰岩	磔囲み+磔充填		
25	中		方形	105	95	110.5%	1.00	大	214	80	角磔	砂岩～泥岩+1/2多孔質石英斑岩	2段囲み+充填中央に立石角磔	斜面直下・一部樹根	
26	中		方形	90	86	104.7%	0.77	中2	203	110	角磔・一部円磔	砂岩～泥岩・珪質砂岩・凝灰岩	囲み+角磔充填	やや乱れる	
27	中		不整形	100	100	100.0%	1.00	大	206	140	角磔	砂岩～泥岩	角磔囲み	樹木根のため乱れる	
28	中		方形	80	70	114.3%	0.56	中	221	135	角磔	砂岩～泥岩・凝灰岩・多孔質石英斑岩	囲み+充填		
29	中		方形?	165	50+α	330.0%	0.83	大	204	125	角磔・一部小円磔	砂岩・珪質砂岩・凝灰岩	大型角磔囲み+充填	右上角ナシ	
30	中		方形	100	90	111.1%	0.90	大	202	100	角磔	多孔質石英斑岩・砂岩～泥岩	角磔囲み	中心部は樹木のため不明	
31	中		長方形	100	60	166.7%	0.60	中	201	105	角磔・大型角磔・一部円磔	多孔質石英斑岩・角磔・凝灰岩・珪質砂岩・泥岩	囲み・中心に角磔	実測済み	
32	中		長方形	112	78	143.6%	0.87	大	203	120	角磔・円磔	多孔質石英斑岩・砂岩～泥岩・珪質砂岩	大型磔囲み・角磔充填		
33	中		長方形	115	85	135.3%	0.98	大	205	110	角磔	砂岩～泥岩・珪質砂岩・凝灰岩	大型磔囲み・角磔充填		
34	中		長方形?	70+α	70	100.0%	0.49	中	207	100	角磔・円磔	多孔質石英斑岩・泥岩・凝灰岩	大型磔囲み	倒木のため詳細不明	
35	中		方形	90	75	120.0%	0.68	中2	204	100	角磔	砂岩～泥岩・多孔質石英斑岩	大型磔囲み	中心部は樹木のため不明	

潜伏キリシタン墓の配置原理・旧木の口墓所

遺構番号	段	種別	平面形	長さ	幅	縦横比	面積	規模	レベル	方位	使用礫	石材	パターン	観察	備考
36	中	小児	長方形	75	50	150.0%	0.38	小	217	90	角礫・円礫	砂岩～泥岩・多孔質石英斑岩	大型礫囲み・小礫充填	乱れ著しい	
37	中		方形	90	96	93.8%	0.86	大	221	95	角礫・一部円礫	砂岩～泥岩・多孔質石英斑岩	大型礫囲み・小礫充填・2段以上	実測済み	実測既存
38	中		方形	85	87	97.7%	0.74	中2	221	65	角礫	砂岩～泥岩・珪質砂岩・多孔質石英斑岩	大型礫囲み・小礫充填	樹根で変形・斜面	
39	下		方形?	100	100?	100.0%	1.00	大	255	70	角礫・円礫	多孔質石英斑岩・砂岩～泥岩	全形は不明瞭・中心に長角礫1立石	斜面のため流れ出す	
40	中		方形	110	105	104.8%	1.16	大	213	40	角礫・円礫	砂岩～泥岩・多孔質石英斑岩・珪質砂岩	囲い・充填・中心に角礫2立石		
41	中	小児	方形	75	70	107.1%	0.53	中	213	50	角礫・円礫	泥岩・多孔質石英斑岩・砂岩	大型礫囲み・小礫充填・左下角に大きい		
42	中	小児	不整形?	53	60	88.3%	0.32	小	216	50	円礫・角礫	砂岩～泥岩・多孔質石英斑岩	不整形・積み方も雑		
43	中	小児	方形	60	55	109.1%	0.33	小	214	45	角礫+小扁平円礫	砂岩～泥岩・珪質砂岩・多孔質石英斑岩	大型角礫囲み+扁平円礫充填		
44	中		方形	96	75	128.0%	0.72	中2	205	30	角礫+小扁平円礫	砂岩～泥岩・珪質砂岩・多孔質石英斑岩	角礫囲み+扁平円礫充填中心に長円礫		
45	中	小児	長方形	80	110	137.5%	0.88	大	211	45	角礫・一部円礫	砂岩～泥岩		かなり乱れる・2基?	
46	中	改葬墓							200		楕形+基壇長方形石材	花崗閃緑岩		木口家「八月九日」	廃棄石材
47	南		方形	75	65	115.4%	0.49	中	135	45	角礫	花崗斑岩	囲み・中心部は不明		
48	南	改葬墓							138		楕形+基壇長方形石材	花崗閃緑岩		木口家「木口ナル立之・大正十四年」	廃棄石材
49	下		方形?	60+α	100	60.0%	0.60	中	220	140	角礫+小扁平円礫	砂岩～泥岩	角礫囲み+扁平円礫充填	左下1/2カット	
50	下		方形?	78	78	100.0%	0.61	中	222	120	角礫・円礫	砂岩～泥岩・火山岩(集塊岩?)	礫囲み+充填中心に長円礫1		
51	下	小児	方形?	52	45	115.6%	0.23	小	279	100	角礫・円礫	砂岩・集塊岩	礫囲み+充填	右上埋没	
52	下	不明	不明	75	140	186.7%	1.05	大	246	160	角礫	多孔質石英斑岩・珪質砂岩・泥岩		倒木のため詳細不明・下半流失	
53	下	小児	方形(乱れる)	85	85	100.0%	0.72	中2	262	140	角礫	砂岩～泥岩・珪質砂岩・多孔質石英斑岩・輝石安山岩	角礫囲み+充填	上1/3やや埋没・他の墓の改葬の影響か?	
54	下	小児?	方形?(乱れる)	60+α	66	90.9%	0.40	中	244	120	角礫	砂岩～泥岩・珪質砂岩・多孔質石英斑岩	囲み+礫充填中心に円礫	改葬のためか右下埋没	
55	下		方形?(乱れる)	65	85	130.8%	0.55	中	284	100	角礫・大型角礫・一部円礫	砂岩～泥岩・珪質砂岩・多孔質石英斑岩	囲み+充填?	上半埋没	
56	下	小児	方形	45	55	81.8%	0.25	小	271	60	角礫	砂岩～泥岩・珪質砂岩・輝石安山岩	囲み+小礫充填	右上半埋没	
57	下		長方形?	60	80	133.3%	0.48	中	279	60	角礫	砂岩～泥岩・珪質砂岩・輝石安山岩		倒木のため詳細不明	
58	下		方形?(乱れる)	75	90	83.3%	0.68	中2	277	160	角礫・円礫	砂岩～泥岩	礫囲み・中心不明瞭	右下無し・抜き後の影響?	
59	下		方形	95	95	100.0%	0.90	大	287	120	角礫・円礫	砂岩～泥岩・珪質砂岩・安山岩?	角礫囲み+充填	円礫(多孔質石英斑岩)中心?	
60	下		方形	70	75	93.3%	0.53	中	287	90	角礫・円礫	砂岩～泥岩・珪質砂岩・安山岩	平坦		
61	下		方形	70	75	93.3%	0.53	中	281	80	角礫	砂岩～泥岩・礫岩	角礫囲み+角礫充填	一部倒木下	
62	下		方形	80+α	100	80.0%	0.80	大	275	55	角礫・一部円礫	砂岩～泥岩・集塊岩	角礫囲み+長円礫1(元は立石?)2段以上		
63	下		方形(乱れる)	80	115	143.8%	0.92	大	291	105	角礫	砂岩～泥岩・珪質砂岩	ほぼ平坦	一部倒木下に隠れる	
64	下	小児?	やや不定形な方形	70	70	100.0%	0.49	中	290	60	角礫・円礫・小円礫	砂岩～泥岩	礫囲み+小礫充填	一部倒木下に隠れる	
65	下	抜き後?	不定形	60+α	120	55.0%	0.79	大	286	80	角礫	珪質砂岩・多孔質石英斑岩・砂岩～泥岩・珪質砂岩		下半は流失・横越上場	
66	下	小児?	方形	65	65	100.0%	0.42	中	259	110	角礫	泥岩・石英斑岩	囲み?	上半埋没・下半流失	
48右	南	改葬墓							144		猫脚基礎・基壇	花崗閃緑岩		木口家・48と同一?	
a	上	礫集積	不定形	180	110				99	110	角礫・円礫	砂岩～泥岩・多孔質石英斑岩		改装時の集積?	
b	上	礫集積	不整形	20	120				108	計測不能	角礫・円礫	砂岩+多孔質石英斑岩		1段目上端に沿う抜き跡又は補強	
c	上	礫集積又は抜き跡	不整形	120	180				91	95	角礫・円礫	砂岩・多孔質石英斑岩		墓石組みの残欠又は埋没	
d	上	礫集積又は抜き跡	不整形	50	60				95	95	角礫	砂岩・多孔質石英斑岩・凝灰岩	角礫囲み		
e	上	伏陣又は墓石基壇?	長方形板石	48	32		0.15		88	85	加工板石(ノミ痕あり)	砂岩		小児墓の可能性あり	
f	中	抜き跡?	方形?	72	75				193	105	角礫	多孔質石英斑岩・凝灰岩	方形囲み	16に切られる	
g	中	抜き跡?		60+α	?				205	135	角礫・円礫	砂岩～泥岩+多孔質石英斑岩		左下の角のみ残る	
h	中	抜き跡		?	60				212	145	角礫・円礫	砂岩・珪質砂岩・安山岩	角礫囲み	下方1辺のみ残る	
J	下	抜き後	長方形	160	100				242	135		一部礫残る(安山岩・泥岩)		深さ10～30cm程度下がる	
K	中	礫集積	不明瞭	55	40				214	214	角礫・円礫	砂岩～泥岩・珪質砂岩		掘り上げ時に移動?	
K	下	抜き後		120	110				284	115				深さ10～25cmわずかに礫残る	
L	中	抜き跡?	長方形?	100	65+α				212	100	角礫・扁平小円礫	多孔質石英斑岩・青灰色泥岩(扁平小円礫)	角礫囲み+扁平小円礫充填	下半流失	
L	下	抜き後		110	90				289	85		砂岩～泥岩・珪質砂岩・石英斑岩		僅かに礫残る	
X	中・下		不定形	80	50+α				214	50	角礫・円礫	砂岩～泥岩・輝石安山岩	囲み?	右下埋没	